國學院大學学術情報リポジトリ

発題1 "不便の効用"と「形武道」の再評価：剣道・杖道にみる(平成二十三年度國學院大學人間開発学会第三回大会公開シンポジウム現代武道の人間開発力：日本の身体文化から何を学ぶべきか)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 植原, 吉朗
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001222

発題①

〝不便の効用〟と「形武道」の再評価―剣道・杖道にみる―

植原　吉朗

先ほどの演武では己の未熟をさらしまして、文字通り「汗顔の極み」でありました。

中村先生のお話の中にありましたが、失敗があると心が乱れる、乱れたところをいかに乱さずに納められるかというところが、まだまだできていない、その乱れが次の乱れを呼ぶというのは、まさに私のことでした。さらにこの壇上でもう一汗かかせていただく覚悟です。よろしくお願いします。

私からの話題提供は「〝不便の効用〟と形武道の再評価」としました。「形武道」という表現の仕方が必ずしも的確、適切でないとの指摘があるかもしれませんが、中村先生のお話にもありましたように、形を修練する中で、武道的な心というか、己の身心を磨くことを目指すのが「形武道」であると、とりあえずご理解いただければと思います。

必修化された武道に対する期待

もうすでにお話があったように、中学校の体育で武道が必修化されることは知られている通りで、私から特に説明するまでもなく、いよいよ平成二十四年度から中学校の体育実技の中で実施されます。

ただ、現場では戦々恐々としているという話もあります。つまり武道の指導ができる先生ばかりとは限らないのです。そこで、どういった形で武道を中学校の授業に導入したらよいのだろうかという試行錯誤や模索が現場では続いています。ねらいとするものが（文部科学省から）提示はされているのですけれども、実際の現場ではどういう効果が期待できるか、期待されているのか、まだまだ暗中模索のところがあります。

私が見る限りですが、期待されているのは、文部科学省のほうからは改正教育基本法の中で、日本の伝統と文化を尊重するということが唱えられてますけれども、子どもを持つ親からは、武道をやれば（これはある意味短絡的ですが）礼儀作法、立ち居振る舞いなど、しつけ教育ができるのではないかとの期待の声も聞かれます。これは悪く言えば、親が本来やるべきしつけ教育的な部分を、武道教育におんぶに抱っこで依存しちゃおうという期待なのかなとも受け取れます。

一方、学校現場で特にスポーツ・課外活動を強くしたいと思っている先生、決して悪い意味とは言えませんが、課外活動で成績を上げたいと考える武道系の先生は「よし、これはチャンス

だ」と思っている先生もいるやに見えます。

学校現場という面では、武道系の先生に限らず一般的に体育の先生は生徒に対して結構影響力もあるので、生徒指導や生活管理が期待されるところがあります。まして武道が入ってくるなら生徒もきちんと行儀よくなってくれるんじゃないかとか、そんなある意味打算的な期待をしているという話も、一部で聞かれます。

授業における道着着用の試み

ただ、武道を実際具体的に導入するには、前提としていわゆるハード面とソフト面の新たな整備が欠かせません。ハード面では柔道でも剣道でも施設の拡充がやはり必要になります。柔道の場合は比較的学校体育での普及が進んでいて、柔道着と道場、あるいはその代替となりうる屋内施設と畳などが備われば まだいいでしょう。剣道の場合は剣道具をセットで用意し保管しなくてはなりません。生徒は垂を着けて胴を着けて、面を着けて小手を付けて、さらに竹刀を使う。道具としていろいろなものを必要とするわけです。それを揃えていくだけでも大変ですし、加えて教員がどういう形で武道の指導ができるのかというところも、まだまだ未解決な部分があります。

私は着衣の部分に着目しました。今まで剣道や弓道の授業を実施する時は、いわゆるジャージ、運動着で受講させるのが一般的です。ならば学生に、剣道や弓道の授業へ興味を持たせ惹きつける要素として、道着を身に付けさせてみてはどうだろう、道着や袴の着用を採り入れたらどういう効果が期待できるかということを具体的に検証してみたいと考えました。

当初期待された効果としては、身体動作の運用や所作への効果、また道着は当然汗にまみれるので、衛生管理面への意識、さらに自分の身を守る道具はきちんと丁寧に扱わなければ自分を粗末にすることになるという意識を高める、などが考えられました。あるいは、これは文科省が一番ねらいとするところかもしれませんが、伝統文化をそういうところから理解し、それ

から物を大事にすることの意味を知ることで心の持ち方に変化をもたらすことに寄与するのではないか、というようなところも、期待として仮説的に考えました。

（画面で示し）これが現場で、本学部での「基礎実習・剣道」の授業です。一昨年まで学生はジャージ着用で受講したのですが、昨年この剣道の授業で初めて剣道着を教材として揃え、学生に身に着けてもらいました。

実はこれが非常に大変なことでして、それは何かというと、まず、なかなかきちんと着用できないのです。もちろん学生は道着や袴を初めて着るのでそれなりの大変さがあるのは当然で、学生たちは剣道着を身に着けることで剣道に取り組むモチベーションは上がるのですが、それを着こなせるようになるまでが大変なのです。これは山田先生の弓道授業でも同様で、弓道着を着用させる際に四苦八苦したと聞き及んでおります。

そして、着るだけではなくて片付けさせることがまた一苦労です。特に袴の場合にはひだがあって、その筋を整えたたんでおかないと、次に使う時には袴はくちゃくちゃになってしまいます。それはやはりさすがにかっこ悪い、しかし、「あ、そうか袴はたたむときれいに収まるんだな」と解るようになると、多少手間がかかっても学生は丁寧にたたむ習慣が身に付いてくるようでした。ただ、たためるようになるまでにはかなりの授業時間を費やします。弓道の方でも山田先生がやはり、袴をたたむご指導に苦労されているようですね。

この道着着用の指導上で認識された課題として、私は最も気になった三点を指摘したいと思います。

まず一点目は、学生が帯紐をしっかり締めない、いや締められないということです。これは、学内を歩けば必ずそういう学生を目の当たりにすると思うのですが、いわゆる「腰パン」、ズボンなどをルーズにはいてだらんと下げた状態で着る習慣の影響でしょうか。つまり、これは着衣を体に固定する習慣が最近の学生にないために、きちんと紐を締めることができないんじゃないか、と思われたのです。普段がそうですから、袴を着させても帯紐をきちんと腰に固定しないのです。袴の裾がズルズルの状態になっているから、ちょっと引っ張ると、下手をすると袴がずり落ちてきそうです。袴がずり落ちたら当然それを足で踏ん付けて転んでしまう危険もあるでしょう。安全確保の意味からも、放置はできない事象です。

いずれにしても袴の帯紐をきちんと締めない状況が頻繁に見られたので、こんなんじゃ駄目だぞと私がギュッと締め直してやると、学生は「ウッ」と唸るわけです、学生は「そんなにきつく締めたことないです」と困惑します。普段からそのように締める、きちんと着衣を体に固定するという習慣が最近はできてないんですね。

二点目の指摘は、着装の乱れを修正できない。あるいは乱れても修正しようとしないことです。剣道着の場合は、動くと次第に胸元がはだけてきますから、普段は稽古の合間に適宜直します。柔道の場合だったらはだけても続けなければならない時があるにしても、それでも「まて」がかかれば当然乱れを直したりということをするはずです。剣道の授業では、乱れても乱れっぱなしで直そうとしない受講生が多くいました。これは道着や袴だけでなく、身を守る剣道具の装着でも紐結びや固定が甘いんですね。特に手が後ろに回った場合の紐がなかなか結べ

ないのです。胴紐を腰の後ろで結ぶとか、面紐を頭の後ろで結ぶなどがなかなかうまくできないんですね。例えば面紐を結ぶ場合、頭の後ろでもちろん結ぶわけですれども、自分じゃ頭の後ろで結んでいるつもりが頭上で結ぼうとしていて、だから当然結び目が面の上にポツンと乗っかっているだけで用をなしていないのに、その状況が自覚できないというような例もありました。稽古中に面が外れたら大変危険なことにもなりかねません。

道着のはだけを直すには、道着の裾をそれぞれ左右に引き寄せればよいのですが、袴の脇から手を入れて裾を引くということができないばかりか、そもそも直そうという意思がないために、写真でお見せするようにどうしても胸元がはだけたままで着装が見苦しくなります。

それ以外にも例えば、袴の締めも緩いものですから、剣道具を付けた際、袴の後ろの腰板の内側に垂の紐が入ってしまったり、袴の腰板がひっくり返ってしまったりします。それから、（写真を示し）これは別に「やらせ」ではありません。稽古中に胴の胸紐が本当に解けてしまって、今にも胴が落ちそうな状態になってしまっています。後ろに剣道部員が二人写っていますが、この二人あきれてます（笑）。しかしこれは笑い話で済ますことではなくて、実際に紐がきちんと結べていないと自分の身の安全が確保できないことの自覚を促している、紐結びは一見面倒で不便だがその良し悪しが自分の身の安全に関わることを教えてくれているのだと気付かせたいところです。

次の写真はちょっと分かりにくいかもしれませんが、紐がいわゆる縦結びになっている事例です。縦結びの何が悪いか、ほとんどの学生はわかっていません。ご存じの通り、死に装束の紐を結ぶ時の結び方だから縁起がどうのこうのという説明の仕方もあるでしょうが、私は経験的に、剣道具の紐の縦結びは動きに伴って解けやすいと見ています。特に手が後ろに回る場合に縦結びになることが多いようです。最初は何が縦結びかさえわからないで、縦結びになった状態で横にねじれば何とかなるだろうとごまかす学生もいましたが、結局それで解決しないのは当然です。正しく結ばないと紐が解ける、紐が解けると防具が外れる、防具が外れると自分の身を危険に晒すことになる、だから自分の身の安全の確保を意識するために、紐結びを確実にできるようにせよと、指導を展開します。

学生に対する質問紙調査

さて、去年初めて剣道着を授業に導入したことの効果を検証するために、質問紙調査を実施しました。視点としては、着た時と着なかった場合との違い、動作の感覚の変化などを想定しました。実施時期は去年（平成二十二年）の十二月、その時の受講生数三十六名のうち、二十四名から有効回答を収集しました。弓道の受講の学生についても山田先生の協力で回答を得ました。

この時は自由記述を求めました。設問は次の四点です。

- 道着を着用して、よい（よかった）と思うこと、よくない（よくなかった）と思うことについて
- 道着の着用は、うまくできるようになったか、困難を感じましたか、またその理由について

・道着の形態や着用法について、現状を維持継承する方がいいか、改良すべきか、またその理由について

・学校体育の授業で、道着を着用することは必要だと思うか、不要だと思うか、またその理由について

学生が上げた良かった点としては、六点ありました。①日常になかった体験ができたこと、②剣道らしさが実感できたこと、③剣道授業への気持ちの切り替えができ動機付けになったこと、つまり剣道着を着ることによって、「よし剣道をやるぞ」という気持ちなった、スイッチが入ったというような表現ができるでしょうか。④武道的な側面などの学習効果、つまり普通のスポーツ種目と違って「今、武道をやっているんだ」という自覚と言えるでしょうか。何をもって「武道」と定義するかは説明の難しいところがありますが、とにかく武道を学んでいるのだという自覚に伴う学習効果、⑤皆が同じ道着を着ているので、連帯感のようなものがどうやら芽生えたようです。⑥安全上の意識向上もちらっと見えました。⑤、⑥に関しては弓道受講の学生の回答では意外と少数でしたが、①から④では弓道でも剣道でもほぼ共通していました。

一方、良くなかったと思う点は次のような回答でした。①まずとにかく時間がかかる、着付けに慣れない、②剣道着は夏は暑い、冬は寒い、なかなか季節に合わない、③着慣れないせいもあって、身体動作が制約される、④着用が面倒である、⑤道着を授業の度に持参する、持って来てまた畳んで持って帰るというのが面倒である、などが見られました。　人間開発学部の学生は学内に個人ロッカーが割り当てられていますが、洗濯もせずに1週間以上もロッカーに道着をしまいっぱなしの学生も

いるようです。次の時間に「くさいな」と感じた学生がいたかもしれません。よく3Kとか4Kだとか言われることは、本来剣道とは関係ないことなのですが、くさいとか、きたないとか、くらいとか、こわいとか、きついとか、揶揄されます。柔道着でも、きちっと管理すれば別にそんなに不潔なことにはなっていないはずです。

着用の困難感についても回答に表れていますが、一方で、「それでも今の（道着の）形状は変えなくていいんじゃないか、面倒だけどこのままでいい」という回答も実は七割くらいあったのです。さらに言うと、道着着用そのものの要否については、回答者全員が必要だと回答しました。これは、本学部の学生には将来教員を目指す、指導者を目指すという志向性の学生が多いからという理由があるかもしれませんが、特徴的です。学生は、武道の授業ではやはり道着を着用すべきと感じた、と回答しているわけです。

紐結びにみる「不便の効用」

そこで、道着を実際に着ている場合と着ていない場合を授業風景で比較すると、こんな感じになります（写真提示）。単純に雰囲気の違いだけでも少し感じていただけるのではないでしょうか。弓道でも、写真を左右に並べて比較してみると、道着を身に付けての授業、身に付けない場合の授業、違いが見て取れるように思うのですが、いかがでしょうか。

剣道着や袴の着用では、とにかく紐結びを要する箇所が多いです。これはある意味、便利物や優れ物が溢れる現在では前近代的と言えるかもしれません。しかし、紐を結び、それが甘くて緩んで解けたら、自分の身の安全が脅かされるんだぞという自覚を促す効果が逆に期待できる、つまりそういう意味では、私は煩雑な紐結びにむしろ「不便の効用」ということがありはしないかと思われたのです。

一方で、せっかく持ってきたので、ここでご披露します。「逆に、紐結びを一切必要としない道着を剣道に導入したらどうなるだろう」。試みにちょっと作ってみたのがこの道着・袴です。これらは全く紐を結ぶところがありません。

道着は、昔の寝間着のように、右裾の長い紐を左脇下の穴から外に出し、腰の後ろへ回すことで自然に裾が奥に寄るようにして、最後は左裾にあるマジックテープで固定します。さらに胸元がはだけないように、襟元にもマジックテープを付けました。そして袴は、前帯紐を腰の後ろにバックルで固定し、腰板からの後ろ帯紐は前に持ってきて袴上端に付けたマジックテープにペタッと、これで終わりです。紐結びは一切なくしました。

このような、紐結び要しない道着を用いるのと、頻繁に紐結びがあるものを使うのとで、授業実施で最終的に得られる効果は違うのか、違わないのか…。どうしても体育の授業で剣道を実施していると、技術的なおもしろさ、楽しさという部分を学生たちにも体験させたい、技能レベルも上がってほしい、と欲が出ます。そのためにはそれに必要十分な時間を取りたいわけですけれど、諸々の紐結び、あるいは面を適確に付けさせるなど、それだけでかなりの時間を奪われてしまい、先に進むのが難しくなります。そこで、紐無結びのような不便を一切省いたら、受講生にとってより興味深い授業展開になるのだろうか、

いや、「不便の効用」を厭わず地道に実践することの方が重要なのではないか、とか、そのあたりを今後検討していきたいと思っています。すみません。発題時間を取り過ぎましたね。

中学校体育における杖道の導入

最後に「形武道」の再評価についてお話をさせて下さい。奇しくも、と言っていいでしょうか、中村先生の方からも例示がされた先ほどの東広島の中学校の事例です。実は私も、中村先生とは異なるルートからこの情報を得ていて、これはいいと感じたので、私の方では、中学校の校長先生をされていた杖道七段の前原敏雄先生から資料まで送っていただき、中学校体育での杖道の導入実践について、いろいろと勉強させてもらいました。

なぜ杖道か。まず前原先生からいただいた資料の写真から、杖道の授業の様子を感じていただければと思います。私自身はまだそんなに杖道が上手なわけではなく、たかだか三段ですが、そんな私が見ても、結構形ができてるな、中学生でここまできたら立派だなという感じがします。

話が変わりますが、なぜ私が杖道を始めようと思ったかと言いますと、杖道を初めて見た時に、なかなか優雅で美しい、素朴にきれいだと感じたのです。それは演武者の技の正確さや間の取り方から感じられたことなんでしょうけども、その時はそれだけでした。一方で別の機会に別の方の演武を見た時に、激しさ、厳しさ、力強さなどを感じるところがあって、「あれ、同じ杖道なのにこの違いは何なんだろう」と不思議に思い、興味が湧いて自ら始めてみたのです。

それが始めたきっかけですが、それからぽつぽつ稽古を続け、杖道二段になった時、平成二十一年に思い立って一般体育授業（スポーツ・身体文化Ⅰ。人間開発学部科目でない）で杖道を採り入れてみたのです。試みたのは再履修の学生を対象にしたクラスです。一般的に再履修の学生というと、モチベーションが低くて欠席がちであったりとか、なかなか授業に意欲的にならないという面がどうしてもあります。実際そのような学生たちだったのですが、お手元の資料にも示したように、驚くべき事に出席率は良くなったし、単位取得率が一〇〇％となりました。再履修生では再度単位を落としてしまう学生も少なくない中で、再履修学生対象のクラスに杖道を取り入れた授業では、前期も後期もこのような好結果が現れました。大変驚きました。

なぜ、杖道を採り入れてみたらこのような好結果になったのか。私自身がまださほど杖道が上手くないのは先ほど申したとおりで、別に手前味噌なことを言うつもりは全くありません。これはむしろ杖道そのものに、あるいは形武道に、形を習得する中に何かそういう効果をもたらす要因が潜んでいるのではないか、学生が授業時の何らかの機会にそれを見出し、そこに食いついてきたのではないか、という気がしたんですね。

これは渋谷の体育館で実際に杖道の授業を展開しているところの写真です。この頃は道着はなくて、ジャージでやっていました。ここにいる学生たちは再履修の学生です。再履修なので、普段はやる気のない態度の学生もいたりしましたので、これらの写真はたまたまいい場面だったかもしれません。それにしても、わりと前向きな様子が窺えると思うんです。この中からは、

杖道の級を取ってみたいという学生も現れて、もう単位を取ったのだから受講しなくてもいいのに、次年度またこの授業で杖道を続けたいという学生さえいました。二、三人ですが。

杖道についての説明は、お手元の資料で見ていただけますし、何より既に中村先生からお話があったとおりです。その目的とするところや効果は、要するに相手を攻撃することよりむしろ制するところに主眼が置かれています。動作的特徴としては、剣道の場合どうしても右手前、右足前というような形に固定化されることが多いのですが、杖道の場合は必然的に右も、左もバランスよく使うところが、体育的にもいいし、誰でも無理なく稽古でき、男女共に同時に実施することができ、なおかつ日本の伝統文化的な部分にも触れる機会があります。

余談になりますが、この杖道の効用を昨年日本武道学会というところで発表したところ、フロアから出てきた意見として、学校体育で採用するのには危険ではないかという指摘がありました。しかし、少しでも気が緩んで距離やタイミング、つまり「間(ま)」を疎かにしたり油断したりすると、杖や太刀が体に当たり直に自身や相手に危険が及ぶ恐れがある状況というのは、逆に間とか間合いがしっかり修得されるところを感じることができれば、安全意識の向上や油断の戒め、集中力にも繋がり、むしろそれはいい教材となりうるのではないかと、私は思ったりもしております。

そういう意味で、必修化のための課題とその克服の可能性を、「形武道」にも見いだすことができるのではないかと考えますが、これはもう既に中村先生からお話があったとおりで繰り返しになるので、省かせていただきます。

「形武道」の教育的効果

まとめに代えて、「形武道」には実は学校体育においても教育的な効果が期待できるのではないか、とあらためて提言を申し上げます。従来ですと、形なんて文字通り形式的でつまらないというふうに教員も生徒も思いがちでしたし、むしろ武道経験者が、形じゃ学生や生徒たちが面白く取り組まないだろうなと思い込んでいて、取り組んでみようとしなかった部分がありはしないかなと思われます。一方で杖道の可能性から垣間見えるのは、中村先生のお話にもあったように、達成感を実感しやすいところがあるのではないか、相手と技をうまくぴたりと決めることができたとか、自分はこの技ができるようになったとか、そういう達成感をわりと理解しやすいことが、形武道に私が可能性を感じるところです。またこれは生涯体育にも十分つながるものではないかと思います。

ということでフロアからもまたいろいろと、ご意見をうかがえれば幸いです。長くなってしまい申し訳ありません。私からの発題は以上で収めさせていただきます。ありがとうございました。

（うえはら　きちお・國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）